

目次

1. 全国交流大会を開催
2. JA 香川県土壌医の会の設立
3. 土壌医活躍中！
片倉コープアグリ株式会社 池頭さん
4. 事業体土壌医の会紹介
やまか土壌医の会（奥村商事株式会社）
5. 地域重要問題研究会を開催
6. 特集 事業土壌医の会アンケート
7. アメリカの学会レポート 📧

1. 土壌医の会全国協議会第9回全国交流会を開催！

10月31日、東京都内にて「土壌医の会全国協議会」第9回全国交流会が開催されました。今年の「優良土づくり推進活動」では、個人5人と2つの地域土壌医を表彰しました。会場で発表があった、受賞者と取り組み内容を抜粋して紹介します。

《農林水産省農産局長賞》

■村上暁美さん

- 土壌診断の活用と種子の安定生産に向けた土づくり

化学性（土壌診断）、物理性（明渠や暗渠の設置、ハーフソイラによる排水性改善）、生物性（緑肥のすきこみによる病害抑制やスタブルカルチによる粗耕起で微生物活性）の3つのアプローチで多角的に土壌を改善し、大豆や小麦などの収量・品質向上と収益性の拡大につなげた。



村上さん（右）

《日本土壌協会会長賞》

■加藤真也さん

- 弟子屈町でんさい栽培における土壌養分傾向を踏まえた施肥改善の取組

リン酸・カリが蓄積した圃場が多く、リン酸が比較的効きやすい未熟黒ボク土であることから、リン酸やカリの減肥の必要性を現地実証や呼びかけなどで丁寧に提案。徐々に減肥銘柄への切り替えが進んでいる。

■加藤学さん

愛知県刈谷市の土壌診断結果に基づいた土壌物理性・化学性改善に向けた土づくり指導

土壌分析から腐植が少ないことや土壌が硬いことが課題として考えられたため、土壌断面調査を実施。生産者に問題点を直接知ってもらう活動を行った。

■アグロカネショウ土壌医の会（発表：武藤安己余さん）

土壌プロ担当者育成活動

土壌や肥料の知識を持った専門家を社内で育成するため、「土壌プロ担当者育成活動」として勉強会や現地検討会などを行った。

《土壌医の会全国協議会会長賞》

■紀岡雄三さん

土づくりと土壌診断による作物生育改善と地域連携による栽培の実践

さまざまなコミュニティと連携を図りながら、自社農場で緑肥や太陽熱消毒など土づくりと土壌診断に基づく適正施肥を実践し、野菜を茨城県特別栽培農産物として販売している。

■松本大輝さん

土壌診断によるニンジンの施肥改善

徳島県のニンジン圃場39カ所を土壌分析し、硝酸態窒素が多すぎるという問題が判明。施肥を見直すなど改善の方向性を示した。

■広島土壌医の会（発表：森昭暢さん）

有機栽培畑において土壌の物理性・化学性に関する基礎実習

広島県有機農業研究会と連携し、土壌分析の結果を共有したり、土壌の硬度を測定したりするなどの基礎実習を行い、土づくりに関する地域ネットワークを築いた。



日本土壌協会会長賞を取られた皆さま
賞状を持つ左から加藤真也さん、加藤学さん、武藤さん



日本土壌協会会長賞を取られた皆さま
賞状を持つ左から紀岡さん、松本さん、森さん

受賞者の皆様、おめでとうございます！

2. 「JA 香川県土壌医の会」の設立

農業団体として初めての事業体土壌医の会が新たに設立されました。

企業やその他団体が中心となって構成されている事業体土壌医の会としては 18 番目です。

会の名称：「JA 香川県土壌医の会」
設立年月日： 令和7年11月19日
会員：香川県農業協同組合の役職員

3. 土壌医活躍中！～片倉コープアグリ株式会社 池頭靖夫さん～

■自己紹介

片倉コープアグリ株式会社の池頭靖夫と申します。現在、弊社の筑波総合研究所にて土壌肥料や微生物資材の研究開発に携わっています。入社して27年、肥料や微生物資材の開発・普及に取り組んできましたが、その中でも私の大きな転機となったのが、4年間の海外駐在と、その後延べ9年間にわたる海外での技術普及・営業の経験です。一般ではなかなか触れることのない国際現場での経験が、今回「土壌医活躍中!」への執筆依頼につながりました。



■土壌医を取得して良かったこと

海外で自己紹介をするとき、「肥料会社の社員です」と伝えても反応は薄いのですが、「私は「土壌のお医者さん」、土壌医です」と言うと、皆一様に驚き、強い興味を示してくれます。「日本にはそんな資格があるのか」と目を丸くされたことは一度や二度ではありません。土壌を“診断し、改善策を提示する専門家”を育成する土壌医制度は、実は海外ではほとんど存在せず、日本独自の資格であることを改めて実感しました。

一昨年、台湾の農業メディアから土壌医として取材を受け、記事にもしていただきました。アジアの圃場を回ると、生産者は作物の見える部分ばかりに目を向けがちで、土壌の健康管理への理解が十分ではない場面によく出会いました。問題が起きると化学肥料や農薬で対症療法的に解決しようとすることも多く、土壌の物理性・生物性の改善にまで視点が届いていないのです。その度に、土壌を科学的に診断し、根本改善の道筋を示せる「土壌医」の重要性を強く感じてきました。

■土壌医になってから

畑にしゃがみ込み、土の匂いや触感から状態を読み取り、必要に応じて海外現地で分析機器を使って土壌分析を行い、栽培条件や農業機械の情報を含めて処方箋を描く“土壌の総合診療医”です。肥料メーカーに所属しながらも、化学肥料を増やすのではなく、いかに賢く使い、土壌本来の力を引き出すかを常に考えてきました。



台湾農業メディアから土壌医取材記事
《上下游新聞》記者 孫維揚 2023 年 08



土壌分析指導の様子

■これから

海外で得た視野と、日本の土壌医としての知識をつなぎ合わせながら、これからも土壌分析に基づき微生物資材や高機能バイオ炭といった新技術を使って栽培改善に努めていきたいと思っています。そして、日本発の「土壌医」という価値を世界にも広げ、持続可能な農業の実現に貢献できればと願っています。



台湾現地で土壌講習会に参加してくれた台湾の方々（左から3人目が池頭さん）

池頭さんにご寄稿いただきました。ありがとうございました！

4. 事業体土壌医の会紹介～やまか土壌医の会さん～

■奥村商事株式会社の紹介

奥村商事株式会社は、徳島藩にて文化年間（1804～1818年）の頃より藍商人として営み、1873年（明治6年）に奥村商事株式会社として創業、150年以上の歴史を歩み、「温故創新」の精神のもと農業の発展に寄り添ってきました。



創業以来受け継がれてきた伝統を大切にしながら、時代の変化や農業を取り巻く環境の変化に対応し、新たな価値の創造に挑戦し続けています。

現在は、肥料卸売・肥料製造・農薬農業資材販売・農産物集荷・藍染め製品販売事業を柱に、生産者の皆さまの“現場の課題”に向き合う総合的な事業を展開しています。

中でも中核となる肥料事業では、関東・東北・甲信越を中心に全国へ広がる販売基盤を持ち、各種肥料・土壌改良材を安定的に供給しています。

また、子会社・関東肥料工業と連携し、作物や圃場条件、栽培体系に合わせた完全オーダーメイド配合肥料を製造。生産者の「あったらいいな」を形にする処方設計力と供給体制は、当社の大きな強みです。

こうした肥料提案を支えているのが、社員一人ひとりの知識と現場理解です。

当社では、会社の柱である肥料について、社員全員が一定水準以上の専門知識を有するために、土壌医検定を活用し、全員が2級以上の資格を保有するよう取り組んでいます。

土壌・作物・肥料の基礎を体系的に学ぶことで、資材販売にとどまらず、土壌診断や生育診断、施肥設計や情報提供まで含めたワンストップの支援を可能にしています。



生産者の栽培から出荷までを支える“現場密着型の伴走”こそが、私たちの目指す姿です。

さらに、茨城・徳島を拠点とした農産物集荷事業では、当社のノウハウを生かして育てられた農産物を、安全・安心とともに市場へ届けています。



また、200年以上の歴史を持つ阿波藍「藍屋敷おくむら」を通じ、日本の伝統文化の継承にも取り組んでいます。

これからも奥村商事株式会社は、「食＝農業」の未来を支える存在として、生産者の皆さまに信頼され、選ばれ続ける企業を目指してまいります。

奥村商事 HP <https://www.okumurashoji.co.jp/>

やまか土壤医の会さんにご寄稿いただきました。ありがとうございました！

5. 地域重要問題研究会を開催

10月9日、土壤医の会全国協議会と三重県土壤医の会は、三重県にて「国内肥料資源活用の拡大」をテーマとする研究会を開きました。現地の研修には29人、講演会には124人が参加し、堆肥ペレット化した牛ふんでお茶を栽培する取り組みについて学びました。

《現地研修》

国内肥料資源の牛ふんを肥料として活用する取り組みに関わる3社を見学しました。

あのかつ牧場（牛ふんを堆肥ペレット化）⇒服部（ペレットを原料に有機配合肥料を製造）⇒ささら（肥料を茶の栽培に活用）



ペレット化設備



肥料製造設備（同社パンフレットより）



製茶工程の聞き取り

《講演会》

① 「有機質資材の種類、特徴と利用について」

野口 勝憲氏（土壤医の会全国協議会会長）

② 「国内肥料利用拡大のための作物の肥培管理と施肥（機械）作業に適した肥料づくり」

③ 講演の総括取りまとめ

長谷川 雅義氏（土壤医の会全国協議会調査研究部会長）

研究会の詳細は「作物診断と土づくり」2025・2026年/12・1月号（Vol.58 No590）月号に掲載しています。

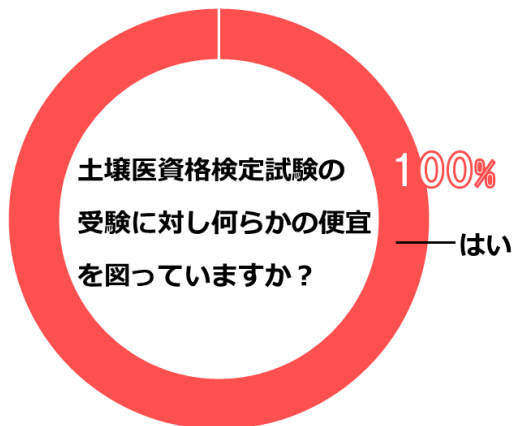
6. 特集 事業体土壤医の会アンケート

「事業体土壤医の会」は、企業やその他団体が中心となって構成されている土壤医の会です。各企業は、土壤医の会を活性化させるためにどのような工夫をしており、活動によってどのようなメリットを感じているのでしょうか？

土壤医の会全国協議会では、2025年6月～8月にかけて、事業体土壤医の会を設立している全17企業に対し、各々の会の運営上の参考としてもらうことを目的に、会の組織化、活性化のための施策や工夫についてのアンケートを実施し、全企業から回答を得ました。

ご回答くださった17の土事業体壤医の会に感謝申し上げます。

問1



検定試験の受験料に対し、社費の補助がある

はい (100%)

検定試験の参考書や過去問題集の購入費用に対し、社費の補助がある

はい (82%)

いいえ

検定試験対策講習会の受講料に対し、社費の補助がある

はい (59%)

いいえ

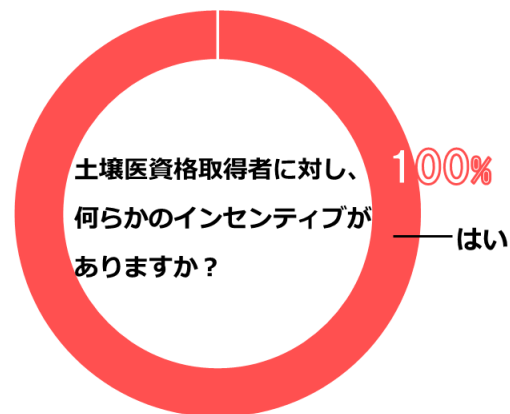
検定試験の日程は、社用勤務（出張）として取り扱っている

はい (47%)

いいえ

その他の取り組み：社員向け受験対策講習を実施する、検定試験対策講習会を出張として取り扱う（2社）

問2



資格登録に際し、登録料への社費の補助がある

はい (100%)

社として取得を奨励、または必須とする資格の一つとして定めている

はい (88%)

いいえ

資格取得に対する報奨金または資格手当の制度がある

はい (53%)

いいえ

資格取得者のみが担当できる職種・業務を設定している

はい (12%)

いいえ

すべての会社で試験や登録料が補助されていました。

さらに8割を超える会社で、土壤医資格取得を奨励ないし必須資格としており、中には資格取得に対する報奨金・資格手当の制度や、資格取得者のみが担当できる職種・業務を設定される会社もありました。資格取得への強いモチベーションがあることがうかがえます。

問3

事業体土壤医の会としての活動、
または社員の土壤医としての
活動に関し、外部（顧客等）へ
何らかの発信を行っていますか？

29%

問4. 「発信を行っている」と回答した会に、何を発信しているかを自由記述で伺いました。※要約しています

- ・農業高校への出前事業や現場での土づくりの実演
- ・「優良土づくり推進活動表彰」の受賞や「作物生産と土づくり」誌に掲載された成果などの記事を会社 HP に掲載
- ・名刺に登録資格を記入し、営業活動時に話題に
- ・資格試験 PR 活動として、顧客訪問時に話題にし、パンフレットを配布
- ・取引先への資格取得の呼びかけや勉強会の実施など

問5. 事業体土壤医の会を設立したことによる企業メリットについて教えてください。（自由記述）

14社から回答をいただきました。

■意識の向上や人材育成

- ・社内の土づくり意識の醸成に寄与した
- ・土壤医資格の取得に関して会社として推奨しているため、自発的に資格取得および進級を目指す行動が見られる
- ・土壤医の会という組織を通じて勉強し、資格を取得するという分かり易い動機づけになっている。営業に必要な土壌や施肥、作物に関する基礎的な技術を身に着ける機会を土壤医の会を通じて会社が提供し、推奨している形になっており、人材育成にも役立っている
- ・社員の土づくり知識や技術の研鑽、および生産現場での土づくり推進活動の高質化と農業生産への貢献
- ・土壌および土づくりに関する知識が全社的に向上し、継続して研鑽する機会が増えた
- ・土壤医資格の取得・維持を支援することで、従業員の技術力向上につながり、企業にとっては土壌に関する提案力の強化やイメージアップにも貢献します。また、研鑽の単位申請や登録更新を一括して行える点もメリット
- ・事業体全体での土壤医資格の維持が容易になるとともに、非会員の講習会参加への意欲が向上した
- ・農業試験場や農家さんとの研修会が開催され、土壌や作物への知識を深めることができた

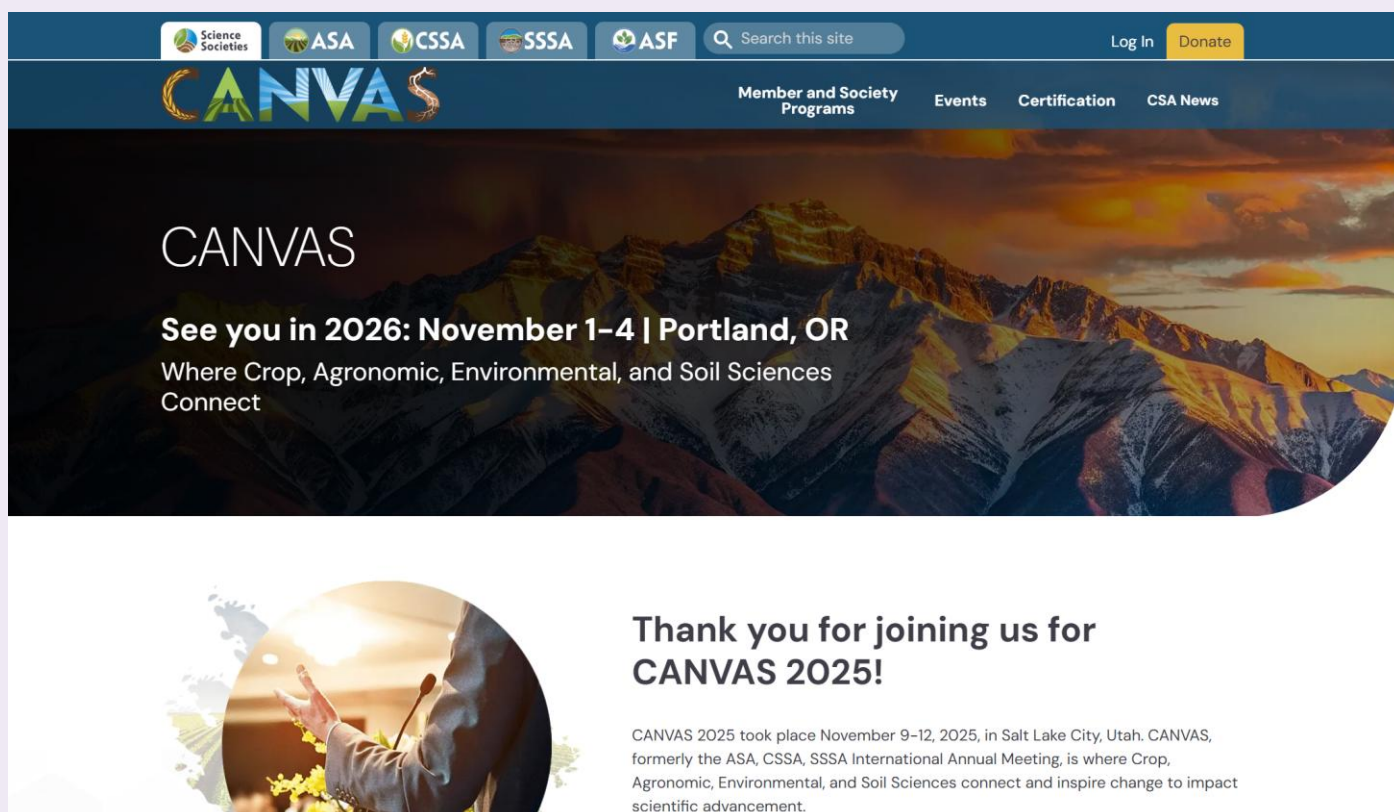
■宣伝効果

- ・土壌肥料に関する知識の向上と営業普及時に活かせる点、また商品を販売するだけでなく技術を売るという一部 IR 的な点をメリットとしてとらえている。
- ・顧客に対して、技術力の向上に努めていることを話題にすることができるとともに、従業員自身の技術力向上への意欲を高めている。営業活動時に社内活動を話題にすることで、会社や商品への関心も高めていただけること、社内勉強会を開催することで、社外説明会や設置している試験圃の情報共有の機会を定期的に持つことができる。
- ・土壤医の資格を取得することで、名刺に資格を掲載することができる。
- ・GAP認証や販売先の監査において、有資格者としての証明としている

■CPD の簡易化

- ・CPD の申請を一元化
- ・日常業務の中での個別 CPD 取得と異なり、社内の研修で CPD が取得でき資格継続が容易。スキルアップにもつながっている
- ・社内研修を CPD プログラムとして実施できることで資格の維持管理の負担が軽減

7. アメリカの学会レポート



この土壌医通信の編者は千葉大学の博士課程の大学院生です。11月、アメリカユタ州のソルトレイクシティで開かれた農学・作物・土壌の合同学会「CANVAS」に参加してきました。初めて参加した国際学会で、アメリカの農地の広大さ、学会の巨大さ（参加者4000人ほど）に圧倒されました。

アメリカといえば農学の最先端。土壌分野でどんなテーマが扱われたのか、レポートします！

■農地ツアー

学会が主催する「Land management and Conservation Section Tour」に参加しました。参加者は20人ほどで世界中から来ていました。このツアーでは、ユタ州の農家圃場やユタ州立大学の灌漑設備を見学しました。

アメリカ西部の内陸にあるユタ州は降水量が少ない地域で、水の保全（Water conservation）が農学の一大トピックだそうです。訪問した畜産農家は土壌の流亡を防ぐために、複数種を組み合わせたカバークロップを実践していました。ユタ州立大学では、効率的な灌漑方法を巨大な圃場で研究していました。穴の開いたチューブを地面に何本も這わせて大きな台車で移動させる方法が一番効率が良さそうとのことでした。



■ 土壌分野のホットピック



多くの研究発表で、「Soil Health (土壌の健康)」がキーワードでした。例えば、堆肥などの有機資材を土壌に入れると土壌の機能がどのように変化するかなどを調べた研究が多かったです。また、有機資材という観点では、カバークロップ (緑肥) を利用することで土壌にどのような効果があるのかを調べた研究がかなり多かったです。発表演題の半数以上がカバークロップ関連だったのではないのでしょうか。さながらカバークロップ学会のようでした。

土壌医が世界で求められる日も遠くないと感じました。

私は稲が雑草化した雑草イネの進化についてのポスター発表と、営農型太陽光発電 (ソーラーシェアリング) の口頭発表を行いました。



編集後記

今年も残すところわずかとなりました。

事業体土壌医の会のアンケートでは、会があることで土づくりの意識向上につながるという回答がありました。一人では難しくても、みんなでモチベーションを上げるきっかけとして土壌医検定や土壌医の会を活用していきたい/活用していただきたいと改めて思いました。

ご感想、ご寄稿等をお待ちしております。e-mail@soil-doctor.net までお寄せ下さい。(丸山)